

➤ 剣の神聖性をどう説明するか . . .

古代中国人の精神の最も深い所に根ざしていた思想により説明されていた

連載

刀剣の歴史と思想

第4回

酒井 利信

干将莫耶の宝剣伝説

古代中国において、最新鋭の武器であつた剣は、太阿の剣に顯著であつたように、その優れた実用性から神秘化されたことはこれまでに確認してきた通りである。さらにこれが、従来の中国思想を多分に吸収しつつ深みをおびて、独特の思想体系を形成していくこととなる。

太阿の剣とともに、中国の宝剣で看過できないものとして干将莫耶がある。この宝剣に注目することによって、古代中国の刀剣思想にもう一步、踏み込むことができる。

▼▼干将莫耶の伝説

干将莫耶は、古代中国を代表する名剣の名前である。

この類まれな名剣を作った剣工は、歐冶子とともに太阿の剣を作った干将と、その妻である莫耶である。つまり、非常に紛らわしいのであるが、宝剣の名と製作者の名が同じということである。

干将莫耶の伝説は、さまざまにアレンジされており、また古代朝鮮の『三国史記』に似た話が記述されているなど、中国のみならず東アジア文化圏の中で、太阿とならないで影響力をもつ名剣であることは間違いない。

干将と莫耶の夫婦は、王の命令で、最高

一対二振りの剣

夫婦の剣工



干将莫耶の伝説
二部構成
・作剣の描写
・復讐談

刀剣の歴史と思想

第4回「干将莫耶の宝剣伝説」

の材料をそろえ、最適の条件を整えて鉄を熔かし、苦労して陽剣と陰剣の二振りの剣を作り上げた。これらのうち陽剣の名を干将といい、陰剣を莫耶といった。

干将は、陽剣は隠しておき、陰剣のみを王に献上した。

王は、実は宝剣は二振りあり、陽剣が隠されていることを知つて怒り、ついに干将を殺した。

この時、妻の莫耶は身ごもつており、干将が殺された後に子供が生まれた。子の名を赤という。息子である赤は、父の遺言により隠されていた陽剣を探し立て、王に復讐しようとする。復讐の意図を知つた王は、懸賞金をかけて息子を探し出そうとするが、赤は山に逃げこみ、そこで出会った旅人から仇討ちの方法を提案される。その提案とは、懸賞金のかかった赤の首と、隠され献上されなかつた陽剣を王のもとへ持つていき、自分がかわりに仇をとるというものであつた。赤は即座に承諾し、剣で自らの首をはねた。旅人は陽剣と赤の首をもつて王に拝謁し、隙をついて王の首を斬り、見事に仇討ちの代役を果たした。

以上が、最もオーソドックスな干将莫耶の伝説の大凡である。

この宝剣伝説は二部構成になつていて、すなわち、宝剣誕生の作剣の描写と、息子が殺された父干将の仇討ちをする復讐談である。

作剣の話は、『吳越春秋』に詳しく記されている。『吳越春秋』は、後漢の趙曄の著とされ、春秋末期の呉越の興亡の歴史を中心記したものである。

『越絶書』と同様に歴史と小説の間に位置づけられるもので、この時代の中国刀剣思想を考える上で欠くことのできない重要な史料である。当史料に、後日談としての復讐の話は記されていない。

復讐談については『搜神記』に記述され



後漢の趙曄の著とされる『吳越春秋』
(『吳越春秋』四部叢刊本、商務印書館より)

ている。『搜神記』は、東晋の干宝作の古小説集である。当史料では、作剣については「楚の干将莫耶は楚王の為に剣を作る。三年にして乃ち成る」(干将と莫耶は、楚王のために三年かけて剣を作つた)と記されるのみで、詳細にふれることはなく、



記述の中心は復讐談についてである。

（なお、「呉越春秋」では、干将と莫耶は呉国の王である闔閭の命によつて剣を作つたと記されているが、「搜神記」では楚王のためとされており、両書の記述に違いがある。）

▼作剣談に潜む中国思想

通常、干将莫耶の宝剣をめぐる話としては、子が父の仇を討つ復讐談に興味がもたれる場合が多いが、刀剣の思想ということに焦点を当てた場合には、むしろ剣工である干将莫耶による作剣の描写が重要となつてくる。

以下、「真越春秋」の記述である（②）。

干将の剣を作るや、五山の鉄精を采り、六金の英を合し、天を候い地を伺い、陰陽光を同じくし、百神臨み観、天氣下降す。而れども金鉄の精銷ず淪流れる。——中略——
莫耶曰く、夫れ神物の化は人を須ちて成る。——中略—— 干将曰く、昔、吾が師

の治を作すや、金鉄の類銷ざれば、夫妻俱に冶爐の中に入れり、然る後に物成る。——中略—— 莫耶曰く、師身を燐すを以て物成るを知る。吾何ぞ難からんや。是にて干将妻乃ち髪を絶ち爪を剪り爐中に投る。童男童女三百人をして鼓橐装炭せしめ、金鉄乃ち濡い、以て遂に劍成る。陽に曰く干将、陰に曰く莫耶。

非常に分かりにくい

文章であるが、要約すると以下のようにな解釈できる。剣を作るのに、山々から鉄を集め最高の材料を用意し、最適の環境を整えたにもかかわらず、鉄は爐の中で熔けなかつた。莫耶



蘇州市虎丘の劍池には、吳王闔閻が名剣とともに埋葬されていると伝えられる（写真提供＝山口直樹氏）



最先端の鉄器を作る仕方を
説明していない

→ 別のモチーフ

刀剣の歴史と思想

第4回 「干将莫耶の宝剣伝説」

が言うには、神聖な物は人によつて成るものだ、と。そして干将が言うには、昔、私の師は、鉄が溶けないと、夫婦で爐の中に入つて鉄を溶かしたという。この話を聞いて莫耶は、自らの髪と爪を切つて爐に投げ入れ、童男童女三百人に炭を入れさせてふいごを吹かせたところ、鉄は熔けて、遂に干将と莫耶という二振りの剣が完成していることは間違いないが、どうもこの文章は剣を作るための現実的な手順を記しているようには見えない。前に『越絶書』は、鉄剣の神威を鉄器が最先端文明であるからと説明したが、『呉越春秋』がここで述べているにしては、あまりにも意味不明な文章である。ここには、別のモチーフがあることは確かである。

ともな理解の仕方で、あえてこの解釈を否定はしないが、私はこの話にはこれとは別のモチーフが潜在しているように思う。

どうして剣の製作者が干将と莫耶の夫婦二人なのか。「天を候い地を伺い、陰陽光を同じくし」といった、天地、陰陽といった概念を含んだ意味不明な描写がなされてるのはなぜか。どういった理由で、夫婦で爐に入り、「童男童女」という男女でふいごを吹くのか。そして出来上がつた剣が陽剣と陰剣、二つあるのか。

本来、剣は一人で作つてもよいし、意味不明な文章はさておいて、一人で爐に入つても人の生命力は付与されただろうし、男女でふいごを吹く必要もない。そして宝剣は一つで十分であるとも考えられる。私はこのことに注目したい。

ここからの話は、特にわれわれ日本人には分かりにくい。

剣の神聖性を語る伝説において、対立する概念が執拗に述べられていることに気づき、私自身このことに注目したもの。当初、それ以上の深い考察をすることができなかつたが、そこに潜在する古代中国の思想について、東洋思想を専門とする高橋進先生から重要なサジエスチョンをいただいた。これを含めて、以後、考察を進めてみたい。

古代の中国人は、物事をすべて対立する事象から理解しようとしていたようである。そして、対立する事象は、単に対立し対立する概念を強調しつつ記述される描写は、『呉越春秋』のこの場面のみにみられたと解する理解の仕方がある。これはもつ

▼▼易の思想の関与



“一陰一陽之謂道”

相待観的世界觀



高橋進先生（左）と筆者（1997年当時）

などのように、対立する概念または事態・事象は、前があるから後があり、後は前があるから、難しいは易しいがあつてのこと。陰陽も陰だけ、陽だけでは成立せず、陰と陽が互いに「あい待ち合つて」陰陽になる、という理論である。

世の中に男だけしかいなければ、自分が男であるということに気付かない。女という存在があつてはじめて男であるということを自覚するように、対立関係にあるものは必ず他方があるからもう一方も存在す

る。ここに対立はあつても分裂はない。この関係を相待（あい待ち合つて）といふ。

こういった考え方を、易的論理といつている。こういった世界觀は、高橋進先生やその師である原富男博士、そしてその系統を継ぐ学派が主張するものであり、少し難しい言い方になるが相待観的世界觀といふ。

また、中国思想では、対立・相待にある事象をひつくるめて象徴的に陰と陽とし、世の中のものは全てこの陰と陽の組み合わせによって出来上がっていると考えた。

千将莫耶の伝説の背景には、こういった世界觀があつた。作剣の話において、現実的な金属器としての剣を作成する手順とは別に、対立する事象が執拗に述べられるのには、こういった世界觀の反映がある。

しかし中国思想においては、全てのものが、陰と陽に象徴される対立・相待にあるものから構成されている。「呉越春秋」では、単に剣もそうだということを述べるためにこういった描写をしたのではないだろう。ここに語られているものは、普通の道

具ではなく、當時神秘化される傾向にあつた剣であり、さらに剣の中でも特に名剣といわれた千将莫耶の作剣の様子である。ここには中国思想のさらなる深みが潜在している。

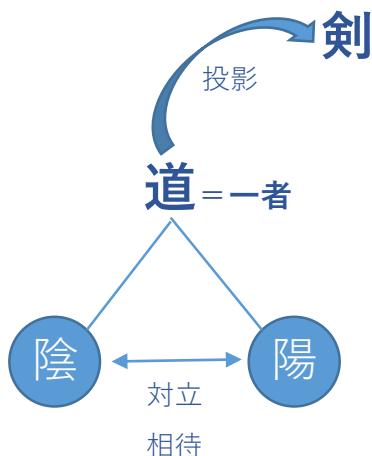
古代の中国人は、非常に具体的かつ合理的にものを考えるため、物事をよく観察して、万物を対立・相待ということで理解したが、さらにもう一步踏み込んで、対立・相待にあるものがなぜそいつた存在のしかたをするのかということを問題にした。例えば、人間がなぜ男と女に分かれているのか、男と女に分けているところのものがあるはずであるということである。つまり、これらを統一してそうさせているもの（原理・法則あるいは型）を、一つ高い次元において考えた。それが道という存在である。『易』に「一陰一陽之謂道」⁽³⁾（一陰一陽これが道という）この世界に存在するもの、ことは、あるいは陰となり、あるいは陽となり、生成変化消滅をくりかえしている。それを道という）と記されているのは、そのことである。

つまり、万物は対立・相待するものの組



刀剣の歴史と思想

第4回「干将莫耶の宝剣伝説」



剣を作るのに、対立・相待するものを執拗に注ぎ込んだのは、この宝剣そのものに、これらを統一する高い次元の一者としての性質を見ていたと考えられないだろうか。そうして作られたからこそ、干将莫耶は神聖であった。そういうた劍を、劍工である干将と莫耶は作つたという描写である。

み合せによって出来ているが、これを高い次元から統一するものとして道がある。これ自体に、対立も相待もない。一つである。いわば一者である。道が形而上^{けいじじょう}的な一者とすれば、陰陽、緩急、前後などは形而下^{けいじか}的である。次元が異なる、ということである。

この話の面白いところは、出来上がった剣が陰陽二つあるところである。この一振りが揃つてはじめて、陰陽を俯瞰して高い次元から統一する神聖な剣となりうるのでは、両者が一体であることに意味がある。王の怒りをかい父干将が殺され、子が復讐を企てるといった騒動も、両者が揃つていなかつたことに起因しての話である。この名剣の神聖性の根拠が、陰陽一体であることを如実に物語っている。はじめから一本の劍であれば、こういった性格は見えにくく。この話は、当時中国の刀剣思想をうまく表現しているように私には見える。

背景にある思想は易の思想であるが、この思考を後に記した文献が、『易』(周易)であるといわれている。

これは道教や儒教といった宗教が確立していくもつと前の、古代中国において原始的なものの考え方である⁽⁴⁾。

干将莫耶の宝剣伝説において、剣は、対立・相待にあるものを統一するものとして、まるで易でいうところの道を具現化するかのごとく神聖視されていた。

〔註〕

- (1) 『搜神記』卷第十一
- (2) 『呂越春秋』闔闔内伝
- (3) 『易』繫辭上伝
- (4) この思考を後に記した文献が、『易』(周易)であるといわれている。

